

COVID-19 禍における主題実習I (基礎看護学) の工夫と成果

著者	住田 陽子, 野田部 恵, 小西 由起子, 越智 奈穂美, 松村 比呂子, 伊津美 孝子, 村上 生美
雑誌名	森ノ宮医療大学紀要
巻	15
ページ	53-64
発行年	2020-05-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1564/00000143/

COVID-19 禍における主題実習Ⅰ（基礎看護学）の 工夫と成果

住田陽子¹⁾，野田部恵¹⁾，小西由起子¹⁾，越智奈穂美¹⁾，
松村比呂子¹⁾，伊津美孝子¹⁾，村上生美¹⁾

¹⁾ 森ノ宮医療大学 保健医療学部 看護学科

要 旨

本稿では、COVID-19（新型コロナウイルス感染症）の世界的な感染拡大を受け、本学の臨地実習の中止、遠隔授業への転換の中で取り組んだ主題実習Ⅰ（基礎看護学）を振り返り、「with コロナ」といわれる今後の多様な臨地実習の可能性について考察した。

基礎看護学領域においては15名の学生が、「患者の夜のニーズ」「チーム医療」「外来看護」という3サブカテゴリーにおいて、各学生が掲げたテーマのもと学修活動を進めた。グループ活動等ではMicrosoft Teams、ZoomといったWeb会議システムを活用した。

実習ではICTを活用しながら模擬夜勤、他学科教員へのインタビュー、映像教材を用いた事例検討を行った。ディスカッションには、外来看護、チーム医療、退院支援、夜勤経験等を持ち、どのカテゴリーにも対応できる看護師3名を招聘した。

本実習では、4年次生の経験と能力に基づく学修レディネスに基づき、発想の転換や学修教材を工夫したことにより一定の成果が得られたが、看護学の学修には臨地での実践が不可欠であることも再認識できた。今後、臨地実習においてもICTを活用した多様な学修形態や教材についてもさらに検討していく必要があるといえる。

キーワード：COVID-19，主題実習Ⅰ，4年次生，ICT活用

連絡先：住田 陽子 SUMIDA Yoko

〒559-8611 大阪市住之江区南港北1-26-16

森ノ宮医療大学 保健医療学部 看護学科

I. はじめに

2020年4月、COVID-19（新型コロナウイルス感染症）の世界的な感染拡大を受け、わが国においても緊急事態宣言が発令された。本学においても大学構内への立入は禁止となり、前期授業の開講が不可能な事態となった。自粛要請が続く中、5月中旬より遠隔授業が開始となったが、前期に開講予定の臨地実習については全面的に中止となった。

臨地実習に関しては、2月に文部科学省、ならびに厚生労働省より、実状をふまえ実習に代えて演習又は学内実習等を実施することにより、必要な知識及び技能を修得することとして差し支えないという通達がされていた¹⁾。本学科基礎看護学領域では、4年次前期に開講する統合分野の主題実習Ⅰについて、6月に実施を予定しすでに事前学修を進めていたが、先述の通達、ならびに緊急事態宣言発令を受け、Web会議システムを活用したゼミナールに切り替えた。このような実習形態は、2011年に本学科が設置されて以来、初めての経験であった。実習内容の計画は困難を極めたが、3年次までの実習経験を基盤とし、到達目標は変更しないまま学生と教員が一丸となって実施することができた。そこで今回、これまで誰もが経験したことのない、このCOVID-19禍における主題実習Ⅰ（基礎看護学）での取り組みを振り返り、「with コロナ」といわれる今後の多様な臨地実習の可能性について考察したので報告する。

II. 主題実習Ⅰの概要

本実習は4年次前期2単位、2週間の実習科目である。3年次までに修得した知識や技術あるいは臨地実習における各領域での学修を統合し、各領域から準備されたテーマに取り組むことによって、看護実践能力育成に繋がることを目指したものである。

学生は、過去の学修を振り返り、興味ある領域のテーマを選択し、これまでの学修では取り組めなかった事柄について、各自がテーマを決めて実習計画を立案し、実践してまとめる。テーマはこれまでの実習における制限や限界をこえて視野を拡大したもの、経験を活かしてさらに専門性を深めるようなもの、今後の看護実践能力に繋がるようなものとし、各領域（基礎・成人急性・成人慢性・老年・母性・小児・精神・在宅・地域）においてサブカテゴリーが準備されている。学生は、その中から関心のあるテーマを選択し、さらに実現可能な実習にするため、課題を焦点化するために活動する。なお、これは卒業研究と連携することが可能である。

基礎看護学領域における本実習の目標は以下の通りである。

1. 選択した主題の意義を説明できる
2. 主題に関する知識や先行研究を活用することができる
3. 主題に関する実践現場の現実を認識することができる
4. 実現可能な実習テーマ・行動計画を設定することができる
5. 実習テーマをもとに学修、記録・考察することができる
6. 一連の過程をプレゼンテーションすることができる
7. 看護専門職者を志す者として、ふさわしい姿勢・態度で臨むことができる

III. 本年度の主題実習Ⅰ（基礎看護学）

基礎看護学領域においては15名の学生が、「患者の夜間のニーズ」「チーム医療」「外来看護」という3サブカテゴリーにおいて学修活動を進め、各学生が掲げたテーマのもと実習を行った（表1）。「外来看護」は、学生数により2グループ編成とし、「外来看護A」「外来看護B」とした。

表 1 学生のテーマ

サブカテゴリー	テーマ
患者の夜間のニーズ	転倒リスクを生まないための夜間の看護実践
	患者の夜間の病室環境
	夜間時の集中力を維持するための看護師の工夫
チーム医療	看護師の退院支援力の向上について
	医療者間の効果的な情報共有
	意思決定支援として看護師に必要なこと
	終末期がん患者が在宅移行するためのチームアプローチ
外来看護A	外来看護師における就労支援の実態
	難聴高齢患者が外来受診した際のコミュニケーション上の感情について
	外来における感染症予防についての課題
	外来における多職種による服薬支援の実態と課題について
外来看護B	外来看護におけるプライマリナーシングについて
	医療機器使用する慢性呼吸器疾患患者の在宅療養支援について
	難病を抱える患者の在宅医療および外来看護師の支援について
	慢性疾患を抱える患児の在宅医療について

次に、実習スケジュールを図 1 に示す。3 サブカテゴリーから、4 グループ（患者の夜間のニーズ、チーム医療、外来看護 A・B）を編成し、グループ単位での活動、2 グループ合同の活動、個々のテーマに合わせた活動を組み合わせた。

例年、サブカテゴリーに適した医療施設の部署等において実習を行っていた。しかし、本年度は本学の前期開講予定の臨地実習が全て中止となったことを受け、臨地以外でできることを考えた。

実習を迎えるまでの約 2 カ月間は、1 週間に 1 回、担当教員とともに文献検索・クリティーク、ディスカッションを行った。教員は 1 グループに 1 名配置し、さらに、2 名の教員がグループ担当教員の指導・フォローを行った。本学では、Microsoft 社の様々なアプリケーションをクラウドで利用できる Office365 を導入していたことから、グループ活動では主に Web 会議システムとしてファイル共有が可能な Microsoft Teams を用い、資料は共有画面や事前のメールを配信し共有した。グループを超えた活動はその集団の構成員数が増えるため、コミュニケーションの円滑化が課題であった。よって、デバイスの画面上で個々の顔が見えやすい Zoom を活用した。

実習では臨床看護師との接点を持てるよう、ゲストスピーカーを招聘した。ゲストスピーカーの選定については、外来看護、チーム医療、退院支援、夜勤経験のある介護老人保健施設の看護管理者 1 名（以下、ゲスト A）、訪問看護ステーション看護師 2 名（以下、ゲスト B）を招聘し、ディスカッションへの参加を依頼した。

ゲストスピーカーとのディスカッション①は、2 グループ合同で 1 グループ編成し、4 グループを 2 グループに再編した。その各々のグループにいずれかのゲストと担当教員が加わり、90 分間ずつ 2 回、回ごとにゲストが入れ替わる形で実施した。

ゲストスピーカーとのディスカッション②は「患者の夜間のニーズ」を除くグループで一部合同グループを編成し、ゲスト B を招き実施した。

ゲストスピーカーとのディスカッション③は、同上①と同様のグループで、それぞれゲストAを招き実施した。

1週目	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目
患者の夜間のニーズ	事例検討	テーマ決定のためのディスカッション	←→ 模擬夜勤	ゲストスピーカーとのディスカッション①	事例検討
チーム医療			・映像教材を用いた ディスカッション ・他学科教員 インタビュー		・他学科教員 インタビュー
外来看護A・B			・映像教材を用いた ディスカッション ・事例検討		事例検討
2週目	6日目	7日目	8日目	9日目	10日目
患者の夜間のニーズ	・事例検討 ・うち1名は卒業生・ 教員へのインタビュー	←→ 模擬夜勤	ゲストスピーカーとの ディスカッション②	ゲストスピーカーとの ディスカッション③	まとめカンファレンス
チーム医療					
外来看護A・B	事例検討				

図1 実習スケジュール

IV. 倫理的配慮

本実習の計画・実施のプロセスでは、一般的な教育において生じる以上の身体的・心理的苦痛を学生に与えないように配慮した。また、本実習を履修した学生や本実習指導に携わった関係者について、本稿では匿名とし、個人情報保護に努めた。

V. 実習のプロセスと成果

サブカテゴリーごとに編成したグループ活動について、そのプロセスと成果を以下に報告する。

1. 患者の夜間のニーズ

本年度は、例年のような臨地での夜勤実習は不可能となったが、交代制勤務に関連した文献を抄読する中で、学生から模擬夜勤実習（以下、夜勤実習と記す）の実施について提案があった²⁾。以下に、夜勤実習のスケジュールを示す。夜勤中の仮眠が及ぼす身体的影響の検討を行い、実習期間中に2回の夜勤実習に挑戦した（図2）。

時間	16:30	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00	23:00	0:00
学生A			←→		←→		仮眠		
学生B	カンファレンス		←→	夕食	←→				LINEビデオ で情報共有
学生C			←→		←→				
時間	1:00	2:00	3:00	4:00	5:00	6:00	7:00	8:00	9:00
学生A	←→				←→				
学生B	←→		仮眠	LINEビデオ で情報共有	←→			カンファレンス	
学生C	←→		仮眠		←→				

図2 模擬夜勤実習のスケジュール

実習初日に、学生 3 名に事例（42 歳、男性、肺癌、COVID-19 緊急事態宣言のため延期されていた手術の術前、術後）を提供し、各々でアセスメント、計画立案、必要に応じてカンファレンスを実施しながら看護過程を展開した。

学生は、実習 2～3 日目、7～8 日目に自宅で夜勤実習を行い、実習時間は実習施設の勤務体制に準じ、16 時 20 分～翌日の 8 時 30 分とした。夜勤の前日に通常以上に睡眠をとらないようにし、十分な睡眠がとれなかった場合は、夜勤実習開始前に 2 時間程度の仮眠をとることとした。夜勤実習中の仮眠は 22 時～翌日の 0 時、または翌日 2 時～4 時に確保した。

夜勤実習は、看護実践を現実的に即して経験することを主眼に置いた。図 2 の両矢印に示した時間帯では、初日に提示された事例について各々が自身のテーマをもとに検討し、23 時と 4 時には患者に見立てた同居家族の行動の変化をメールで配信し、問題については対策を考えた。また、LINE ビデオを使用し、事例患者の検討の申し送りや各学生の体調確認を行った。

夜勤実習終了時、疲労度を評価するために、主観的眠気および疲労感を Visual Analog Scale (VAS) を用いて測定し、サーカディアンリズムの指標として体温を測定した。慢性疲労度は、日本看護協会が 2008 年に行った「時間外労働、夜勤・交代制勤務等緊急事態調査」のアンケート項目の一部、ならびに、既存の文献を参考に学生が作成した健康状態の自覚症状のチェック項目で評価した。体温測定については実習前、後に対しては変化がなかったが、主観的眠気および疲労感の結果は、本来の睡眠パターンを主とした生活習慣が関係していると示唆された。

主題実習当初、臨地実習中止により、学生は夜勤実習に対する学修意欲が低下したが、教員がその気持ちに寄り添い“今できること”を学生とともに考えた。このともにある関わりを通して学生の模擬夜勤の提案をもとに学生と教員が協働し綿密に計画を立てることができた。実習では同一事例を 3 名の学生のテーマの視点から検討し、意見交換をすることで、学びの共有が有意義にできたと考える。夜勤実習後、学生からは「普段、夜起きていることは苦痛ではないが、課題をこなすことは集中力が途切れたりすることがあった。」との意見があり、自宅というリラックスした環境であっても、夜間に看護を実践する難しさを少なからず実感できたと考える。加えて、看護師が夜間にケアをするための、仮眠の重要性や適切な休息の必要性が認識できたと考える。

夜勤実習以外にも夜勤中の看護について、教員やゲストスピーカー、卒業生に対するインタビュー、ならびにディスカッションを行い、臨地の状況が確認できたと思われる。学生は、患者の生活をとらえる際に夜間と日中を切り離す傾向があったが、夜間看護は日中の看護師の関わりやケアと関連が深いことが理解できた。また、患者が夜間に安寧な生活を送るためには、日中の状態も含めた身体的、精神的、社会的な視点からのアセスメントが重要であるとの認識が深まったといえる。

2. チーム医療

実習テーマを明確にしていくプロセスにおいて、学生はこれまでの臨地実習で受け持ってきた患者の退院後の生活や、医療・看護、即ち継続看護、地域包括ケアシステムについて高い関心を持っていることが分かった。そこで、本実習では事例検討、映像教材を用いたディスカッション、他学科教員へのインタビューを計画し実施した。

事例検討では、3 年次の臨地実習での受け持ち患者に関する情報を共有し、チーム医療の観点から「高齢の COPD 患者の退院支援における病棟看護師の役割」「青年期の脊髄損傷患者の意思決定支援における看護師の役割・チーム医療の役割」というテーマを掲げてディスカッションを行った。ディスカッションを活発に行えるよう、事例の理解のために不足している知識を各学生が事前に獲得して臨んだ。

映像教材の活用については、丸善出版の映像教材配信サービス『Educational Video Online』の「終末期がん患者に必要なとされる看護や家族の思い」を視聴し、各学生がこれまでの実習経験等から得た知

識や文献からの学びをもとに事前に意見をまとめておき、ディスカッションに臨んだ。

他学科教員へのインタビューを計画した学生は、3年次の臨地実習において、脳血管障害の回復期でリハビリを行っている患者を担当していた。その際に、治療に対する見解について理学療法士と他職種との間で相違があり、患者に影響を来している場面に遭遇した。その体験から学生は、患者を取り巻く医療者間の情報共有のあり方に疑問を抱いた。そこで、医療者間の効果的な情報共有について学びを深めたいと考えた。

当初、担当患者の治療に中心的な役割を担う臨地の理学療法士や作業療法士、言語聴覚士に対し、チーム医療における効果的な情報共有に関する認識について情報収集することを計画していた。しかし、臨地実習中止を受け、インタビューの対象を、ライセンスを持ち臨床経験のある本学の教員に変更した。また、3年次のIPW（Interprofessional Work）論で看護師と関係性が希薄な印象であった臨床検査技師の認識も知りたいと考え、臨床検査学科の教員へのインタビューも計画に加えた。

インタビューの依頼は、担当教員から各学科の学科長に行い、その結果、理学療法学科、臨床検査学科の教員から協力を得ることができた。インタビューはZoomを用い、1時間程度実施した。インタビュー内容は、①先述の事例での見解、②チーム医療における情報共有の方法、③チーム医療について学生に重点的に教授していること、④チーム医療における看護師の役割についての認識、とした。結果、タイムリーな情報共有を行うためには電子カルテは有効だが、細かな患者の状態を伝達するにはやはり、face to faceのコミュニケーションは不可欠であること、また、互いの職種に対して敬意、尊重する姿勢を持つことも大切であることが分かった。

理学療法学科教員からは、実際にオンライン授業で使用されているパワーポイントスライド、動画を通して質問への回答を得た。学生は緊張と経験不足により質問内容を伝えるのみにとどまり、回答を受け、そこからさらに質問を深めることが困難であった。

臨床検査学科教員へのインタビューでは、回答内容から学生が自身の考えを述べ、一方通行ではないインタビューを実施することができた。そして後日、インタビューを纏めた内容をMicrosoft Teamsにファイルにて添付し、同グループの学生に報告し学びを共有した。

臨地実習中止を受け、当該学生は当初、臨地の医療者へのインタビューが行えないことから虚脱感を示していた。担当教員はその気持ちに共感し、臨地以外で医療者へのインタビューを実施できないか模索した。その結果、学生が本学独自のIPW論を学修してきた4年次生であったことからこともあり、他学科に協力を求める発想が生まれ、他学科の教員へのインタビューの計画を立案することができた。またこれは、オンラインの実習でなければ生まれなかった計画ともいえる。

ゲストスピーカーとのディスカッションでは、学生自身の経験や文献検討から得られた知識をもとに、各学生の疑問や着眼点について、特に実践に関わる点を積極的に質問し、日々のディスカッションから得られた学びを活かした活発な意見交換を行うことができた。特に「在宅死」については「家族に迷惑を掛けたくないで施設死を望む」「家族と最後まで一緒に自宅で過ごしたい」といった倫理観、人生観、ひいては看護観を導き出すようなディスカッションにも発展した。学生からは「実際に行われている内容を聞くことができ、地域で暮らす患者（利用者）を理解できた」「将来、退院支援をする際に役立てたい」「他の学生の看護観を知る機会ができた」という反応が得られた。

3. 外来看護 A

本実習ならびに実習に向けてのゼミナールがオンラインになったことで、学生は関心事を調べる時間は十分に確保できた。そのためグループ活動では、自己学修した内容をグループで共有し、他者の実習テーマについても学修しておくことで、全ての学生のテーマを深められるようにした。自己学修では、医学中央雑誌、CiNii Articles を利用し学術論文から知識を得るほか、官公庁や職能団体など信憑性を

担保できるオフィシャルサイトからの情報を収集した。

グループ活動では、主題実習 I の趣旨を常に念頭に置いた。4 年次生はこれまでの臨地実習を通して 10 名～12 名の患者を受け持ち、看護を展開しているため、これまでの臨地実習で経験したこと、受け持ち患者への看護を想起することが可能であった。したがって、本実習の趣旨にある「実習での制限や限界をこえて視野を拡大したもの」を学修するために、退院後の患者の生活をイメージし、医療施設から自宅へと繋ぐ看護の役割について検討することとした。

「自分が受け持った患者は今、どのような生活をしているだろうか」との教員の問いかけに対し、学生からは「少し認知力が落ちてきていたから、薬を飲み間違えていないか心配」「経済的に苦しいと言っておられたが、公的支援の手続きができたか」「仕事復帰を希望していたが、治療と両立できているか」などの発言が聞かれた。これらの心配事に対して、受け持ちの学生としてどのような退院支援ができたか、という視点でディスカッションを行った。外来や訪問看護でどのような継続的な看護が必要であるかを文献で裏付けながら検討し、さらに入院時に退院後の生活をふまえた関わりができていたか意見交換した。

上記の検討において、学生の関心が高く共通していた課題が「退院後の服薬管理」であった。いずれの学生も 3 年次の臨地実習では高齢者を受け持ち、その際、服薬管理は看護師が行う印象をもっており、退院後の管理について疑問が生じていた。このような経緯より、1 週目のゲストスピーカーとのディスカッションでは、「外来における服薬管理について」を取り上げた。外来看護の実際を聴く中で、外来における服薬管理は薬剤師や訪問看護師との連携が重要であることを学ぶことができた。

一方、自分たちが経験してきた病棟での看護と比較し、外来は多くの患者を対象とすること、短時間の関わりであることで看護の難しさがあるのではないか、という疑問が生じた。そこで、2 週目のゲストスピーカーとのディスカッションでは「外来における患者のニーズを引き出す看護師の関わり」を取り上げた。学生は自らの受診経験や自己学修をふまえ、忙しい看護師に声をかけづらい、短い関わりでは本音を言えないなど、患者側の想いを共有した。ゲストスピーカーからは、短時間で多くの患者を看るためには、異変やリスクに気づける観察力が必要であると説明され、患者の訴えの傾聴、受容に留まらず、顕在化していない患者のニーズに気づくことも重要であることを学んだ。

ディスカッションにゲストスピーカーを交えたことで、外来看護師の看護実践の現実が細やかに伝わり、オンラインであっても学生は想像力をはたらかせることができた。そこに実習での経験や自己学修で得た知識を発揮し、4 年次生ならではの発展的なディスカッションへと展開できた。

4. 外来看護 B

事例検討を中心に実習を計画した。事例は学生が作成した事例、ならびに映像教材を用いた。

事例の作成については、当該学生が 3 年次の臨地実習で受け持った患者の情報を基にして内容をまとめた。特に、臨地実習で受け持った患者が退院後どのような支援を受けているか、退院前の指導が退院後どのように活かされているかという点に着目し、ディスカッションテーマに掲げた。

ディスカッションに際しては、事前に当該学生からグループの学生に事例を配信した。グループの学生は事例を熟読し、患者の情報から問題点および必要な支援について根拠をふまえて考えたものを文章化し、ディスカッションに臨んだ。初回は、教員の介入を必要としたが、回数を重ねるごとに、司会の学生が発言を促すアプローチができるようになり、意見交換が活発になっていった。その結果、学生が臨地実習で学ぶことができなかった退院後の生活支援について、看護師だけでなく、多くの専門職の連携・継続した支援がなされていることに気づくことができた。多くの学生が、「1 つのテーマに対して、各自学修したことについてディスカッションを通して様々な意見を聴くことで、多職種との協働が非常に重要であることを学ぶことができた」と述べていた。今回の実習では臨地実習に比し、各テーマ、学

修内容の共有が学びに繋がったと考えられる。

映像教材を用いた事例検討では、「慢性疾患を抱える患児の在宅医療について」のテーマに即し、小児の高次脳機能障害への支援シリーズにおける、病棟および外来看護師と多職種との連携による在宅療養の支援方法についての事例を映像教材として採用した。事前に視聴し、自己の意見と課題を整理した上でディスカッションを行った。これまでの事例検討とは違い、映像教材により多職種の関わりや支援の流れがイメージ化されたことから、患者や患者を取り巻く人々の表情や場の空気等の細かな部分もグループで共有することができた。この事例検討では、学生から「映像で視ることで多職種の動きや支援の仕方、その中での看護師の関わり方が、明確に理解できた」といった意見が聞かれた。映像での可視化により、これまで退院支援カンファレンスなど、概念で理解していたものがより具体化され、学生は様々な職種の支援における立ち位置を理解でき、活発なディスカッションに繋げることができたと考えられる。また、事例の視聴覚的な情報をどの学生も平等に収集でき、情報を有機的に活かしたディスカッションに繋げることができた。

ゲストスピーカーとのディスカッションでは、これまでの事例検討で外来看護や在宅療養との継続看護について学修したことから、質問内容などを明確にして臨むことができた。ゲストスピーカーが訪問看護、外来看護の経験者であることから、臨床現場の現実的な状況や支援方法について詳細を聴くことができた。また、臨地の看護師の語りを聴き、質疑応答を交わしていく中で、曖昧であった内容を明確に、且つ深化させることができた。学生はゲストスピーカーとの関わりを通して、「その人が置かれている生活状況やこれまでの背景、固有のニーズを把握し、患者主体の看護の提供や、多角的な視点を持つ必要があることなどを、様々な意見を聞くことで考えを深めることができた」「訪問看護師の話を聞かせていただき、患者の価値観に添う支援の提供方法を考え、その人の生活に焦点を置いて看護を考えていくことの大切さに気づくことができた」などの意見を述べていた。

VI. 考察

1. 臨地実習における経験の活用

本実習は、学生自身がテーマを探究するプロセスにおいて多くを自力で行うところに統合的な学修の意義がある。テーマの焦点化においては、これまでの臨地実習で受け持った患者や関わりの場面を振り返り、患者や看護についての強い思い入れ、大切にしていることや疑問について文献検討を進めた。それらをグループ活動で共有することで、学生は視野を広げテーマを追究できたと考える。これまでの臨地実習では受け持ち患者の健康上の問題や背景に相違はあっても、コミュニケーションや看護ケアの個別性など、学生間では共通する課題が多いが、本実習はテーマや実習方法が広範囲になることにより、学生同士の刺激が多くなった³⁾ことも、広い視野での学びにつながっていた。また、本実習は卒業研究と連動することができるため、研究的な視点を加える意味でも有意義であったと考える。

本実習は本年度、臨地ではできなかったものの、選択した主題の意義の説明、知識や先行研究の活用、実践現場の現実の認識、実現可能な実習目標・行動計画の設定、プレゼンテーション、看護専門職者としての姿勢・態度、といった実習目標の中核部分は変更することなく進めることができた。これは、実践現場での経験の中からの気づきを丁寧に抽出したところが大きく寄与したと考える。また、過去の実習の事例を改めて文章化し、現象の意味づけや方法論の検討など、発展的なディスカッションを繰り返すことができたのは、4年次生の経験と能力に基づく学修レディネスがあったこと、また、それを活かしたいという学修ニーズがあったことが関連していると考えられる。

2. コロナ禍における教材の活用

2020 年、我々がかつて経験したことのないコロナ禍に見舞われた。本学は 4 月から登校・通勤の自粛、5 月中旬からオンライン教育となった。本実習は、医療や住民の生活が展開される現場で行うことになっている。そこで今回の実習では、臨地に行けないことにより、何を教材とするかということが大きな課題となった。実習までに準備していた文献検討を活かす形で、臨地の現状を理解できる教材を学生も教員も模索した。

その結果、実習で初めて ICT や映像教材を活用した⁴⁾。臨地では多様な現象を意図的にとらえていく必要があるが、映像教材を用いて事例検討をしたグループは、学修ニーズに合致した場面を効率よくとらえることができた。また、ICT の活用が事例検討のタイミングや所要時間の臨機応変な運営を可能とし、先行研究の検討もじっくり行うことができた。映像教材は、グループ全員が同じ場面をとらえることができたため、臨地実習のように 1 人が体験した場面を再構成して伝えなおすことがなく、各学生の純粋なとらえ方に基づいたディスカッションにもつながった。

また、インタビューでは、医療大学である本学の特徴を生かし他学科教員を活用したことも、臨地ではなしえなかったことである。インタビュースキルが十分に発揮できない部分もあったが、互いに心理的に余裕をもって時間と環境を共有できたことで、効果的なインタビューの方法を学ぶこともできた。

3. “実践”における発想の転換

臨地実習中止の決定を受け、実習方法を模索する中で、患者や家族に接すること、あるいは、医療・看護の実際を知ること、実践者の声を傾聴することは不可能と考えていたが、ICT を活用し「患者の夜のニーズ」のグループは模擬夜勤を実施した。臨地ではないものの、臨地をイメージした環境を疑似体験し、創られた空間に身を置いて経験から学んだことは意義深いと考える。基礎看護学領域で夜勤実習を希望する学生は多い。したがって今回、夜勤実習が不可能となったことは、実習へのモチベーションを大きく低下させかねない出来事であった。しかし、敢えて「患者の夜のニーズ」を選んだ学生たちの学修意欲は、自分たちの目的達成に向けて新たな試みの文献を読み込み、模擬夜勤に向けて計画を立案するという行動を後押ししたといえる。その結果、「with コロナ」に際し、現場に近い時間や空間の創造について示唆されるものがあった。

また、学修意欲を促進するよう教員が事例を作成したことで、学生個々のテーマの視点から検討課題が導き出され、実践やディスカッションを深めることができた。学生の強い学修意欲と教員の適確な学修環境調整により、臨地での実践にとらわれない発想の転換が柔軟に活かされ、学生にとって満足度の高い学修となったと考える。

4. ゲストスピーカーとのディスカッション

我々は通常の教科目において、看護のゲストスピーカーを迎える。そこでは、ゲストスピーカーのプレゼンテーションが主になることが多く、ディスカッションは質疑応答に留まっている。本実習では、ゲストスピーカーには学生全員の「実習の抱負」レポートを送付し、個々の実習テーマと学びのニーズを予め伝えた。それは、ゲストスピーカーのプレゼンテーションが学生のニーズに合致することを狙ったもので、その後のディスカッションの活性化を期待したものである。その結果、ディスカッションは専門職の考え方のプロセスや心理、看護観を交えながら、自身の経験や現場での実践例をもとに進められるとともに、学生たちのディスカッション内容に対しゲストから具体的な助言を受けることができた。

実習 4 日目は、ゲストスピーカーへの質問が集中し、ディスカッションとして成立しない場面もあったが、終了後はディスカッションの進め方について学生が振り返り、ディスカッションを効果的に行うために何が必要かを検討した。そこで学生は、ディスカッションは単なる質問に終わらず、テーマに向

かつて思考を深め、自身の意見を発展させていく必要があることを認識した。その結果、実習終盤は、テーマに向かって意見を掘り下げ、互いに影響を与えあいながら考察を深めていくことを経験することができた。

臨地に身を置いた実習ができなかったからこそ、ゲストスピーカーである看護師らから語られる患者の状況や様子、看護の思考・実践のプロセスは、学生のイメージや理解を促進する上で貴重であった。そこに携わっている看護師の看護観を交えた語りを聴き、さらには、看護師から問題提起されたことを共に検討する経験もでき、机上にとどまらない現象からの学びに近い学修ができたと考える。

5. オンライン実習の限界から認識した、臨地実習のあり方

これまで、オンラインでの実習でいかに質を落とさない工夫をしてきたかを述べた。しかし、我々は学生との関わりの中で、自明ではあるが、臨地に身を置いて五感を活かして学ぶことに代わる方法や工夫を見出すことに多くの限界を感じた。映像教材の選択や事例の作成は、学生の実習テーマに応じて意図的に行ったが、その場面に身を投じることはできない。あるテーマをもって現象を見ると、五感をフルに活用して解釈していくプロセスにおいて理論や経験知を活かし、実践への突破口を見つけること、即ち、“生きた学修”は臨地でしか成しえないと考える。このように現象をとらえ、解釈する力、理論等に基づき“Evidence-Based Nursing”を実践する力を磨いていくことで、学生の主体性、責任感をはじめとする専門職としての態度、何よりも看護観が芽生え、養われ、高められていく。したがって、実践の科学であるという看護学の特性をふまえ、看護の価値を見つけるために、臨地実習は唯一無二の学修形態であるといえる。「with コロナ」という風潮の中で学修方法を検討する際に、向かうべき方向は「臨地実習」であることを改めて認識した上で、本実習で実感できたICTのメリットを最大限に活かし、固定概念を打ち破る柔軟な発想に基づく臨地実習を創造することが重要であると考ええる。

VII. おわりに

2020年度の主題実習Ⅰ（基礎看護学）は、臨地に赴かず、学内でも対面することのない、Web会議システムを活用した。サブカテゴリーごとに4つのグループを編成し、1グループあたり3～4名の学生と教員で文献検討やディスカッションを進めていった。実習中のコミュニケーションツールにはMicrosoft TeamsやZoomなどのweb会議システム、メール、電話、というように、あらゆるツールを複合的に用いた。限られた状況で何ができるかを学生・教員が一丸となって考え、未経験の実習方法に積極的に挑戦したこと、「ICTの活用でできること」、「臨地以外だからできること」と発想を転換し、既定概念にとらわれない柔軟な思考で実習を計画できたこと、教員が学生をリードするのではなく、4年次生の経験と能力を引き出し、取り組みをサポートする姿勢で関わったことが、本実習の本質を損なわなかったどころか、視野を広げ、学びを深めることにつながったと考える。

一方で、学生がオンラインでの学びを臨地に身を置いて学ぶことに完全に置き換えることはできないことも改めて認識できた。看護学は実践の科学である以上、現象に即したEvidence-Based Nursingであることが求められ、その学びを内面化するためには、臨地での実践が不可欠である。今回の実習では、現場の看護師であるゲストスピーカーとのディスカッションを実施し、看護師の語りから、現実の看護場面でのアセスメントプロセス、関わりの創意工夫、それらから醸成された看護観を知ることができた。それは、学生が当事者意識を持つための経験としては十分とはいえないが、現場をより明確に想像でき、学生が実習テーマとして掲げた問題を考察することに大きく寄与したと考える。

Microsoft TeamsやZoomなどのシステムはコミュニケーションを図るために重要な役割を果たしていたが、五感全ては活用できないため全体把握が限定的であり、グループ活動に参加しているメンバー

同士の非言語的な心理が伝わりにくい場面も認められた。各ツールの特徴と限界をふまえ、そこからくる学生への心理的な影響についても把握し、対処することが必要である。オンラインでは、無機質になりがちな教育をいかに有機的に方向づけられるかということが課題となる。今後は、臨地実習の幅を広げ、質を高めるために、部分的に ICT を取り入れ、別の角度からの臨地実習の環境づくりの可能性を模索することを課題としたい。今回見出した ICT の活用を臨地実習に活用する手立てについて建設的な検討をしていくことは、COVID-19 をはじめとするあらゆる状況下で学びを止めないためにも、重要かつ急務であると考ええる。

文献

- 1) 福島統. COVID19 と医学教育—文部科学省及び厚生労働省からの通知文書から—（2020 年 2 月 25 日から 5 月 16 日までの情報から）. 医学教育. 2020 ; 51(3) : 206-210.
- 2) 折山早苗, 宮腰由紀子. 夜間にとる 120 分間仮眠がその後の睡眠と身体活動量に及ぼす影響—夜勤を想定した夜間にとる仮眠の影響—. 労働科学. 2017 ; 93(3) : 67-79.
- 3) 鈴村初子, 春田佳代, 相模佐希子, 諏訪美栄子, 中村美奈子, 東山新太郎ら. 過去 6 年間の統合実習の状況に関する文献検討. 修文大学紀要. 2018 ; 10 : 59-67.
- 4) 鋪野紀好, 塚本知子, 生坂政臣. 千葉大学総合診療科におけるオンライン臨床実習の取り組み. 医学教育. 2020 ; 51(3) : 286-287.

Ingenuity and achievements of Theme-oriented Practicum (Basic Nursing) in COVID-19

Yoko Sumida¹⁾, Megumi Notabe¹⁾, Yukiko Konishi¹⁾, Naomi Ochi¹⁾,
Hiroko Matsumura¹⁾, Takako Izumi¹⁾, Ikumi Murakami¹⁾

¹⁾Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Morinomiya University of Medical Sciences